

[53] ワシーリエフ版『ドン・キホーテ』

～光の泡が弾けるような透明感～

2001年7月13日 東京新聞 夕刊

『ドン・キホーテ』というバレエはプティパの原振付なのだが、『白鳥の湖』や『眠れる森の美女』などで知られるこの大家の作風とは舞台の雰囲気などが少々違う。それというのも初演から二十年後に、ポリシヨイ劇場で若いゴールスキーがプティパ版を改訂し、町の人々が活発に動きリアリステイックな舞台を実現して、それが後世に伝えられたためである。

つまり現代の私たちが知っているのは、このプティパとゴールスキーの合作というわけだ。もともと老プティパはこの改訂がたいそう気に入らなくて、せっかくなかったお年寄りというものは、どこぞで変える必要があるのかと、『自伝』のなかで悲憤慷慨。偉くなったお年寄りというものは、どこの国でもどの時代でも同じようなものらしい。

さて時代下って、先ごろ東京バレエ団が初演した新版『ドン・キホーテ』も、そのプティパ／ゴールスキー版を典拠としている点では他のエディションと変わらない。演出・振付はワシーリエフ。『ドン・キホーテ』とは因縁の深いポリシヨイ・バレエのダンサーで、現役時代にはダイナミックな超絶技巧と人間的な温かみのある演技で世界的な人気スターだった。95年のポリシヨイ劇場大改革のときには、芸術監督の上に位する総監督に就

[53] ワシーリエフ版『ドン・キホーテ』

～光の泡が弾けるような透明感～

2001年7月13日 東京新聞 夕刊

任して、バレエだけでなくオペラの演出にも腕を振るった。そのワシーリエフが持てる才能を総動員したのが、今回の『ドン・キホーテ』である。

新版に向けてワシーリエフが抱いたコンセプトの一つが「コール・ド・バレエの一人一人を主役に」ということだった。プティパの作品では、コール・ド・バレエは「バレエの軍隊」というその名のとおり、整列して一糸乱れぬ動きをしていた。ゴールスキー版では群衆としての迫力がある。しかしワシーリエフは、その群衆の各人に個性を持たせ、ストーリーの展開にそれぞれ独自の参画をさせようと考えた。

さて幕が上がって、第一幕は町の広場。人々の動きはたしかに伸びやかだ。クラシック・バレエにありがちな型にはまった身のこなしでもなく、さりどていかにも舞台の群衆といった（オペラなどでよく見る）調子を揃えた盛り上がりでもなく、一人一人が自由なパターンで、心と表構を持って動いている。そのために舞台空間がとても軽やかで、爽やかな風が吹き抜けているような雰囲気だ。その透明感はおそらく美術のせいでもあっただろう。ブルーを基調にした印象派の絵のような背景は、これまでの『ドン・キホーテ』のイメージをすっかり変えて、北スベインの明るい日差しを

[53] ワシーリエフ版『ドン・キホーテ』

～光の泡が弾けるような透明感～

思わせる。

だが、そのせいだけでもない。バレエの舞台の空気はもっぱらダンスの質によって決定するものだ。ソリストやコール・ド・バレエにいたるまで、動きがじつに鮮明で切れがいい。そうした東京バレエ団のスタイルが振付によってじょうずに引き出されて、この光の泡が弾けるような透明感になったのではないだろうか。

素晴らしかったのは第二幕の「夢の景」。このバレエのなかで一か所だけ、短いチュチュを着て踊られるクラシクな場面だが、クールなメカニズムとファンタスティックな情感が見事に調和して、まさに現代、二十一世紀ならではのセンスである。

もしプティパとゴールスキーがこのワシーリエフ版を見たら、どんな感想を持っただろう。バレエはさらに美しく進化したと言うのではないだろうか。それともやっぱり、出来上がったものがあるのに何を今更…、と怒るだろうか。

2001年7月13日 東京新聞 夕刊